

第7回ぐんま青少年基本調査報告書

平成29年3月

群馬県子ども未来部

はじめに

群馬県青少年健全育成条例の前文には、「群馬県の次代を担う青少年が心身ともに健やかに成長し、社会の一員として使命と役割をもって自立することは県民すべての願いであり、青少年が健やかに成長できる地域づくりは県民の努めである。」とあります。

近年、急速に進む少子高齢化、地域社会の活力の低下や子育て環境が大きく変化する中で、青少年の健全育成は喫緊の重要課題と考えております。

こうした中、県ではこのたび青少年の実態を的確に把握するため、第7回ぐんま青少年基本調査を実施しました。今回の調査では第6回調査を踏まえ、引き続き小・中・高校生、保護者を対象に、家庭・学校・地域社会等における青少年の意識と行動に関する調査を行うことに加え、小・中学生の教員に対して児童生徒の日々の行動を観察する中でどういった課題等が考えられるかを併せて調査しました。また、急速に普及したスマートフォン等社会環境の変化に対応した調査項目、さらに、調査対象となる青年の裾野を広げ、結婚観に係る調査項目を追加して、青少年の実態把握に努めました。

この報告書が、青少年の健全育成を推進する一助として、関係者の皆様に広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査の実施にあたり、御協力いただきました児童・生徒の皆さん、対象学校をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成29年3月

群馬県こども未来部長 中村弘子

目次

第1章 調査実施の概要.....	- 1 -
1 調査の目的.....	- 1 -
2 調査の方法と実施状況.....	- 1 -
3 調査の内容.....	- 2 -
第2章 調査対象の属性.....	- 3 -
第3章 調査結果の概要.....	- 13 -
第4章 調査項目別集計.....	- 19 -
1 学校生活.....	- 19 -
(1) クラスや学校の様子.....	- 19 -
(2) 友達や同級生への対応.....	- 24 -
(3) 勉強をする理由.....	- 26 -
(4) 部活動への参加（中学生、高校生）.....	- 32 -
(5) 友人関係.....	- 34 -
(6) 相談できる先生の有無（青年）.....	- 43 -
(7) 強い影響を受けた人（青年）.....	- 43 -
(8) 学校生活の意義（青年）.....	- 44 -
(9) 教育方針（保護者）.....	- 45 -
2 家庭生活・家庭教育.....	- 46 -
(1) しつけについて.....	- 46 -
(2) 父親・母親との関係.....	- 50 -
(3) 家族のあなたへの思い（小学生、中学生、高校生）.....	- 58 -
(4) 家の手伝い（中学生、高校生）.....	- 60 -
(5) 子どもの将来像（保護者）.....	- 62 -
(6) 子どものことでの悩みや不安（保護者）.....	- 63 -
(7) 子育てや子どもの教育の相談相手（保護者）.....	- 64 -
(8) 利用している塾やクラブや習い事（保護者）.....	- 65 -
(9) 家庭で身につけるべき重要なこと（保護者）.....	- 66 -
(10) 教育事情に関する諸課題（保護者）.....	- 68 -
(11) 子ども（達）だけの食事のしたく（保護者）.....	- 69 -
(12) 子どもとの会話時間（保護者）.....	- 69 -
(13) 生きていく上で最も大切に考えていること（保護者）.....	- 70 -
(14) 子どもの頃どのように育てられたか（保護者）.....	- 71 -
(15) 子どもの食事や生活の習慣（保護者）.....	- 72 -
(16) 経済的に困ったことや悩んだこと（保護者）.....	- 73 -
3 地域社会.....	- 74 -
(1) 居留意向（中学生、高校生、青年）.....	- 74 -
(2) 居住環境（小学生）.....	- 75 -
(3) 地域活動.....	- 76 -

(4) 地域づくり等への参加意向（青年）	- 82 -
(5) 今までに体験したこと（小学生、中学生、高校生、青年、保護者）	- 83 -
(6) 近所の人にあったときのあいさつ（小学生、中学生、高校生）	- 86 -
(7) 身体の不自由な人が困っているのを見かけた時（小学生、中学生、高校生）	- 87 -
(8) ボランティアへの参加意思（中学生、高校生、青年）	- 88 -
(9) 社会貢献活動（中学生、高校生、青年）	- 89 -
(10) 子育ての観点からの居住地への満足度（保護者）	- 91 -
4 生活全般.....	- 92 -
(1) 現在の生活の満足度（小学生、中学生、高校生、青年）	- 92 -
(2) 悩みや心配ごと	- 93 -
(3) 得意・自信のあるもの（小学生、中学生、高校生）	- 98 -
(4) 規範意識.....	- 99 -
(5) いじめについて	- 105 -
(6) 不登校気分とその理由	- 114 -
(7) 男女が家庭や社会で果たす役割についての考え（中学生、高校生、青年）	- 118 -
(8) 休日の過ごし方	- 119 -
(9) 希望する暮らし方（青年）	- 120 -
(10) 考え方や生き方（青年）	- 121 -
(11) 日本の社会の問題点（青年）	- 122 -
(12) 出生率低下の要因（青年）	- 124 -
(13) 結婚について（青年）	- 126 -
5 就労意識.....	- 130 -
(1) 中学生、高校生の就労意識.....	- 130 -
(2) 青年の就労意識	- 135 -
(3) 子どもの就労に対する考え方（保護者）	- 143 -
6 インターネット.....	- 144 -
(1) スマートフォン等の所持状況（小学生、保護者）	- 144 -
(2) インターネットを使う頻度（中学生、高校生、青年、保護者）	- 145 -
(3) 携帯電話やスマートフォンの利用時間（小学生、中学生、高校生）	- 146 -
(4) インターネットを使用しないことによる不安（小学生、中学生、高校生）	- 147 -
(5) フィルタリング利用に対してのイメージ（中学生、高校生、保護者）	- 148 -
(6) フィルタリングの設定状況（中学生、高校生）	- 148 -
(7) インターネットについて家族と話をする（小学生、中学生、高校生、保護者）	- 150 -
(8) メールをしたり会ったりする（小学生、中学生、高校生、青年、保護者）	- 151 -
(9) ブログや SNS 等で自分に関する情報を発信する（中学生、高校生、青年、保護者）	- 153 -
(10) メディアリテラシーやペアレンタルコントロールの状況（保護者）	- 154 -
7 若者の自立支援.....	- 155 -
(1) 普段の過ごし方（相談機関等利用者）	- 155 -
(2) ひきこもり	- 156 -
(3) 家族との関係（相談機関等利用者）	- 159 -

(4) 今やりたいこと、将来必要なこと（相談機関等利用者）	- 160 -
(5) 現在の就学・就労状況（相談機関等利用者）	- 161 -
(6) 家庭の経済状況（相談機関等利用者）	- 161 -
(7) 相談機関	- 162 -
8 自立について（中学生、高校生、青年、相談機関等利用者、保護者）	- 170 -
9 行政が取り組むべき課題（保護者）	- 171 -
10 教員からみた児童生徒の状況（教員）	- 172 -
(1) 児童生徒の持つ特徴（教員）	- 172 -
(2) 児童生徒の経済状況（教員）	- 176 -
(3) 児童生徒の持つ自己肯定感（教員）	- 178 -
(4) インターネット	- 180 -
第5章 調査結果から考えられること	- 182 -
1 自己肯定感を育むもの	- 182 -
(1) 小学生、中高生の『得意なものや自信のあるもの』の数	- 182 -
(2) 自己肯定感が高いのはどんな子どもか	- 183 -
(3) 自己肯定感を高めることが重要な理由	- 189 -
(4) 子どもの自己肯定感を高めるために必要なこと	- 191 -
2 「結婚についての考え方」と就労状況や就労意識	- 193 -
(1) 結婚についての考え方と就労状況や就労についての考え方との関係	- 193 -
(2) 「結婚しやすい社会」と感じている人はどんな人か	- 196 -
(3) 若者が結婚しやすい社会だと感じられるようにしていくために必要なこと	- 196 -
資料	- 197 -
1 調査票	- 197 -
2 集計表	- 223 -

第1章 調査実施の概要

1 調査の目的

近年、少子高齢化やインターネット・携帯電話の普及等による情報化の急速な進展に伴い、青少年を取り巻く環境が著しく変化してきました。青少年及びその保護者の意識、生活、行動も大きく変化しているなかで、ニート、ひきこもり、不登校、非行など青少年の抱える問題も深刻化しており、より幅広い観点からの青少年育成推進への取組が求められています。

今回の調査は、家庭・学校・地域社会の各生活場面における青少年等の意識と行動を明らかにし、今後の青少年に対する施策のあり方について検討を行うための資料を得るとともに、「第2次群馬県子ども・若者計画」策定の基礎資料として活用するために実施するものです。

2 調査の方法と実施状況

(1) 調査地域

：群馬県全域

(2) 調査対象者（標本抽出数）

	配布部数	回収数	回収率
ア 小学校5年生	691人	678人	98.1%
イ 中学校2年生	690人	659人	95.5%
ウ 高等学校2年生	510人	477人	93.5%
エ 小学校5年生及び 中学校2年生の教員	40人	40人	100.0%
オ 小学校5年生及び 中学校2年生の保護者	1,381人	1,277人	92.5%
カ 青年（18～29歳の 勤労青年・学生）	1,000人	611人	61.1%
キ 相談機関等利用者	150人	63人	42.0%

(3) 標本抽出方法

ア 小学生・中学生

県内の小学校・中学校から地域バランス等を考慮して対象校を決定し、各学校において、対象学年の中から対象学級を任意に抽出します。

イ 高校生

県内の高校から地域バランス、男女比等を考慮して対象校を決定し、各学校において、第2学年の中から対象学級を任意に抽出します。

ウ 小学校5年生及び中学校2年生の教員

アにおいて調査対象となった児童・生徒の担任教員とします。

エ 小学5年生及び中学校2年生の保護者

アにおいて調査対象となった児童・生徒の保護者とします。

オ 青年（18～29歳の勤労青年・学生）

企業等に勤務する勤労青年については、地域・職種等を考慮し県内の事業所を決定し、各事業所において対象者を任意に抽出します。

学生においては、地域、課程等を考慮し、県内の専門学校・大学を決定し、各学校において対象者を任意に抽出します。

カ 相談機関等利用者

県内の相談機関等において自立に不安を感じている若者を任意に抽出します。

（4）調査の方法

ア 小学生・中学生・高校生	対象学級において教員の指導のもとに記入
イ 小学生・中学生の保護者	調査対象となった児童・生徒を経由して配布・回収
ウ 教員	対象学級の教員に配布・回収
エ 青年（勤労青年・学生）	事業所、学校において調査票を配布、郵送により回収
オ 青年（相談機関等利用者）	相談機関等において調査票を配布、郵送により回収

（5）調査実施期間

平成28年11月28日～平成29年1月12日

※なお、この報告書では、前回、前々回のぐんま青少年基本調査結果を比較のため掲載していますが、その状況は次のとおりです。

第5回ぐんま青少年基本調査・・・平成19年9月調査

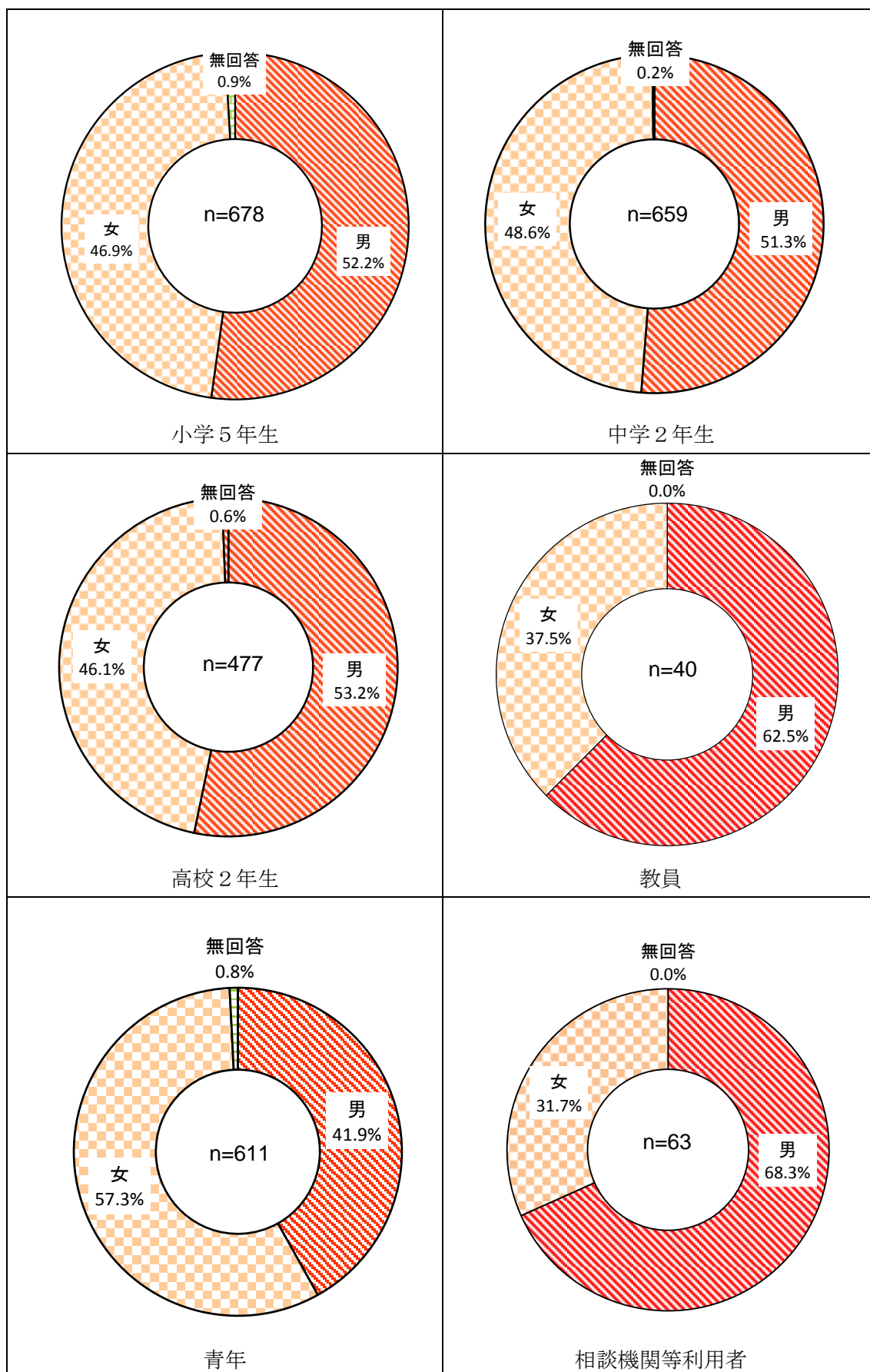
第6回ぐんま青少年基本調査・・・平成24年2月調査

3 調査の内容

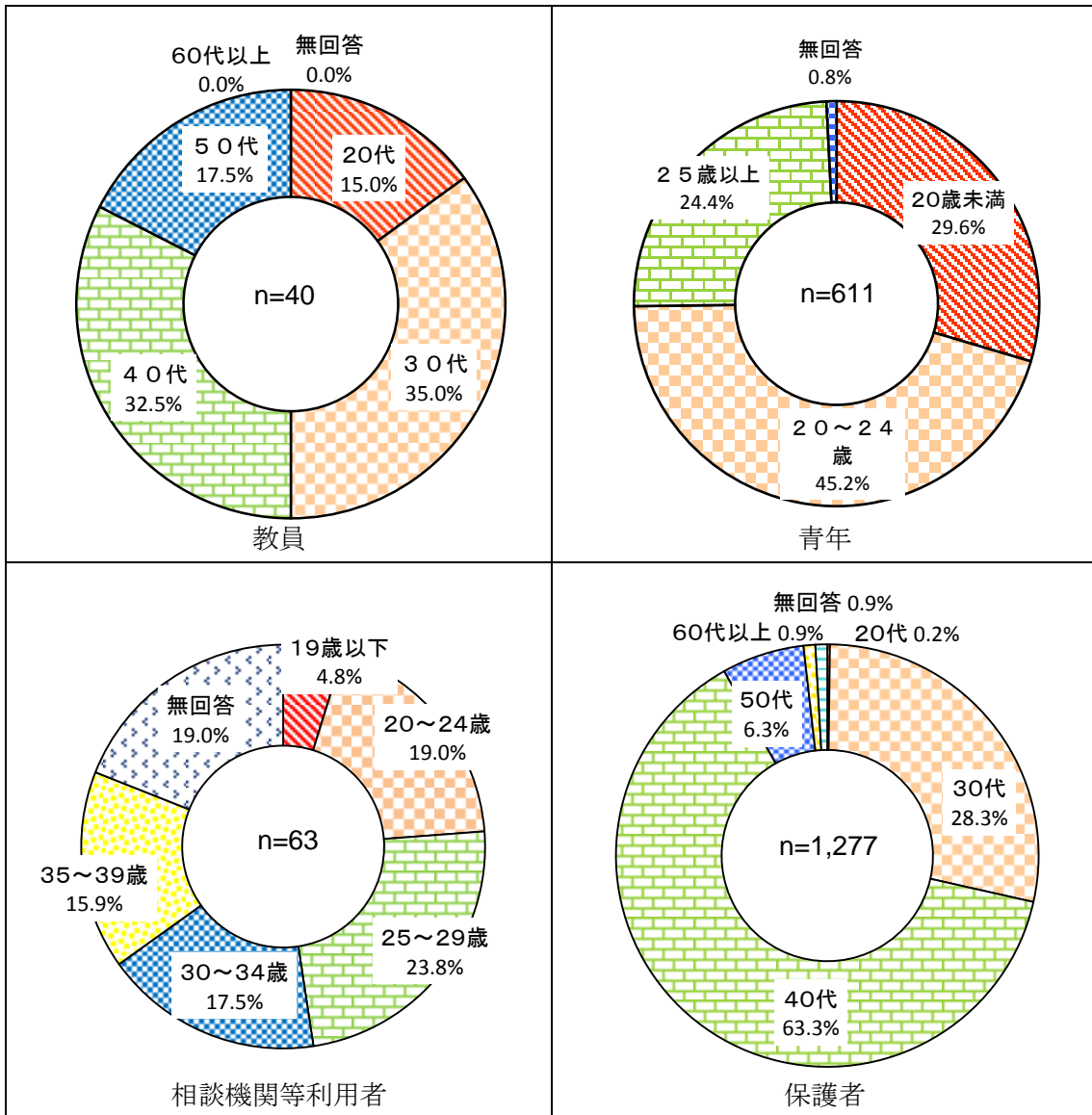
児童生徒	：学校生活、家庭生活、地域社会、生活全般、インターネット
保護者	：家庭教育、地域社会、人生観、生活意識、インターネット、施策について
教員	：児童生徒の特徴、児童生徒の経済状況、児童生徒の自己肯定感、インターネット
青年	：学校生活、生活全般、職場生活、人生観、生活意識、インターネット
相談機関等利用者	：生活状況、職業・就職、相談機関の利用状況

第2章 調査対象の属性

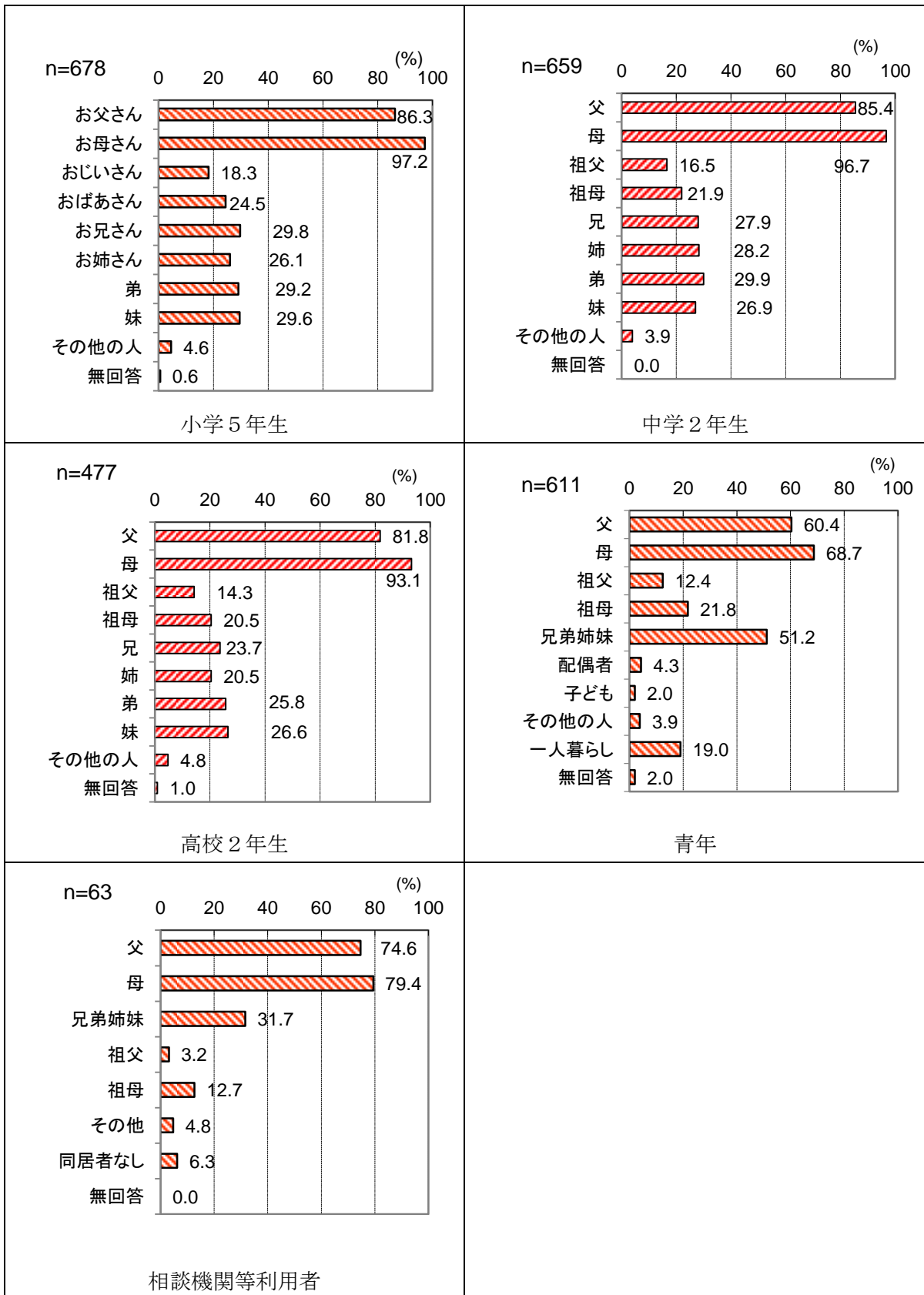
1 性別



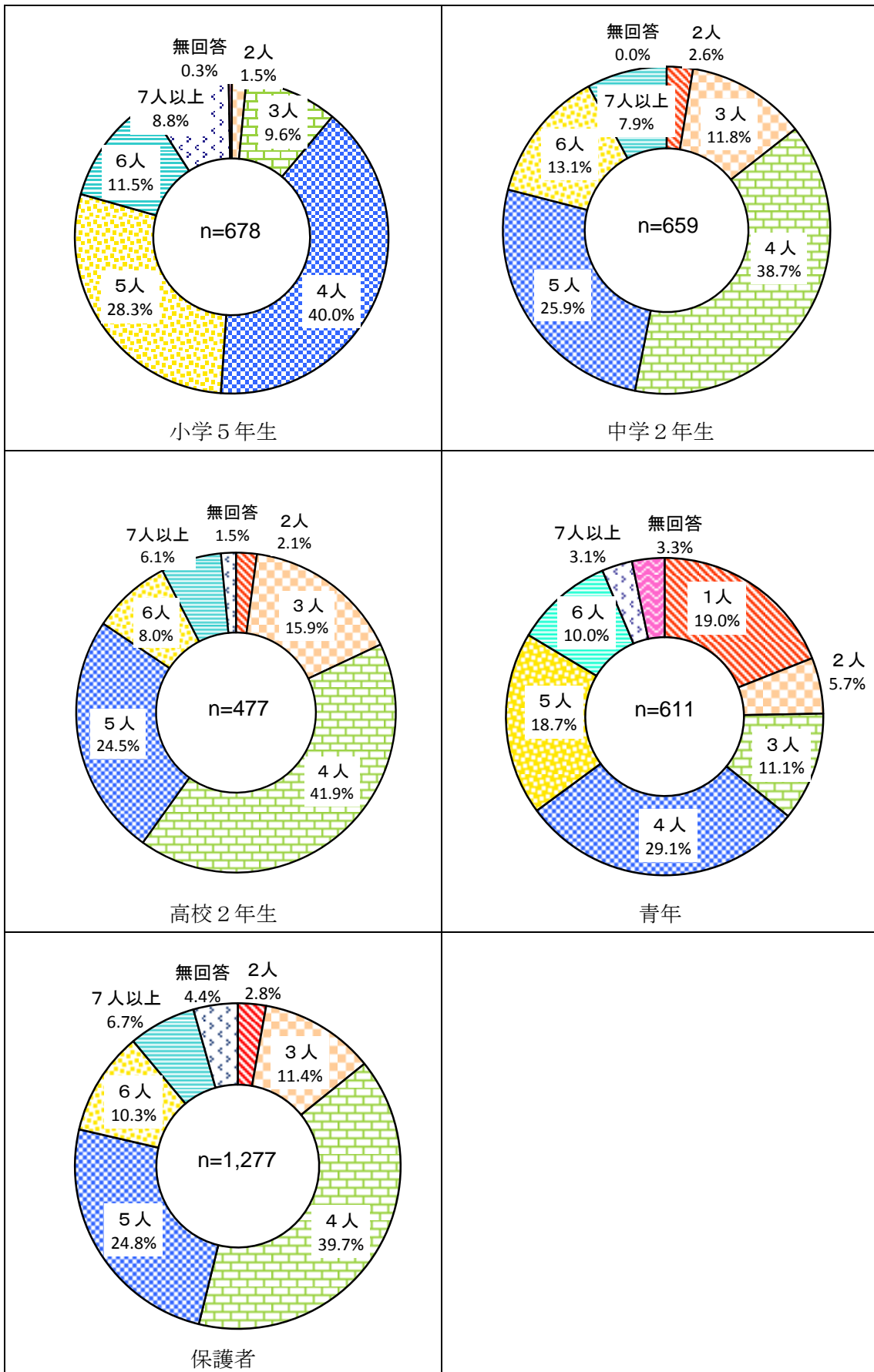
2 年齢



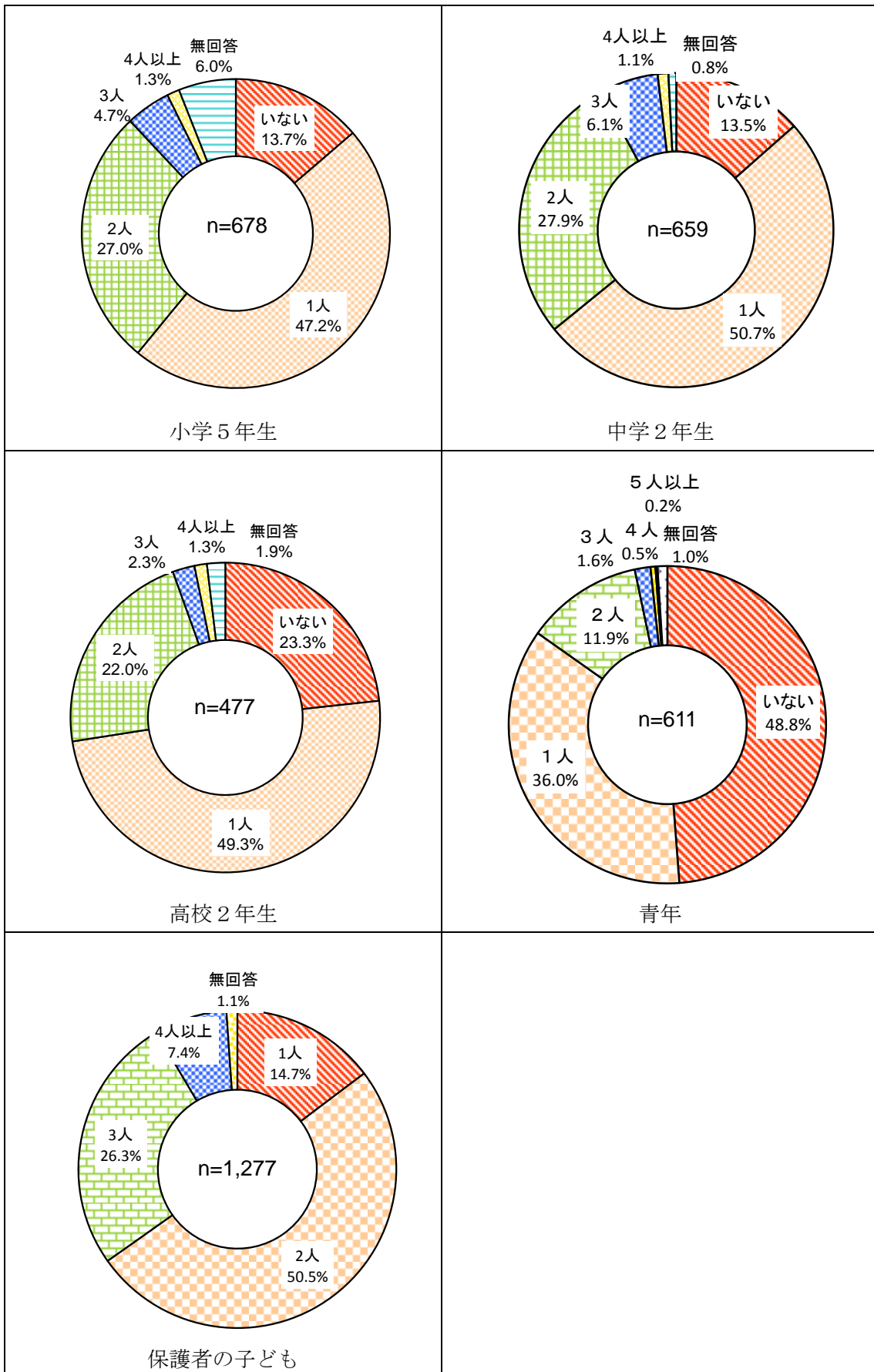
3 同居家族



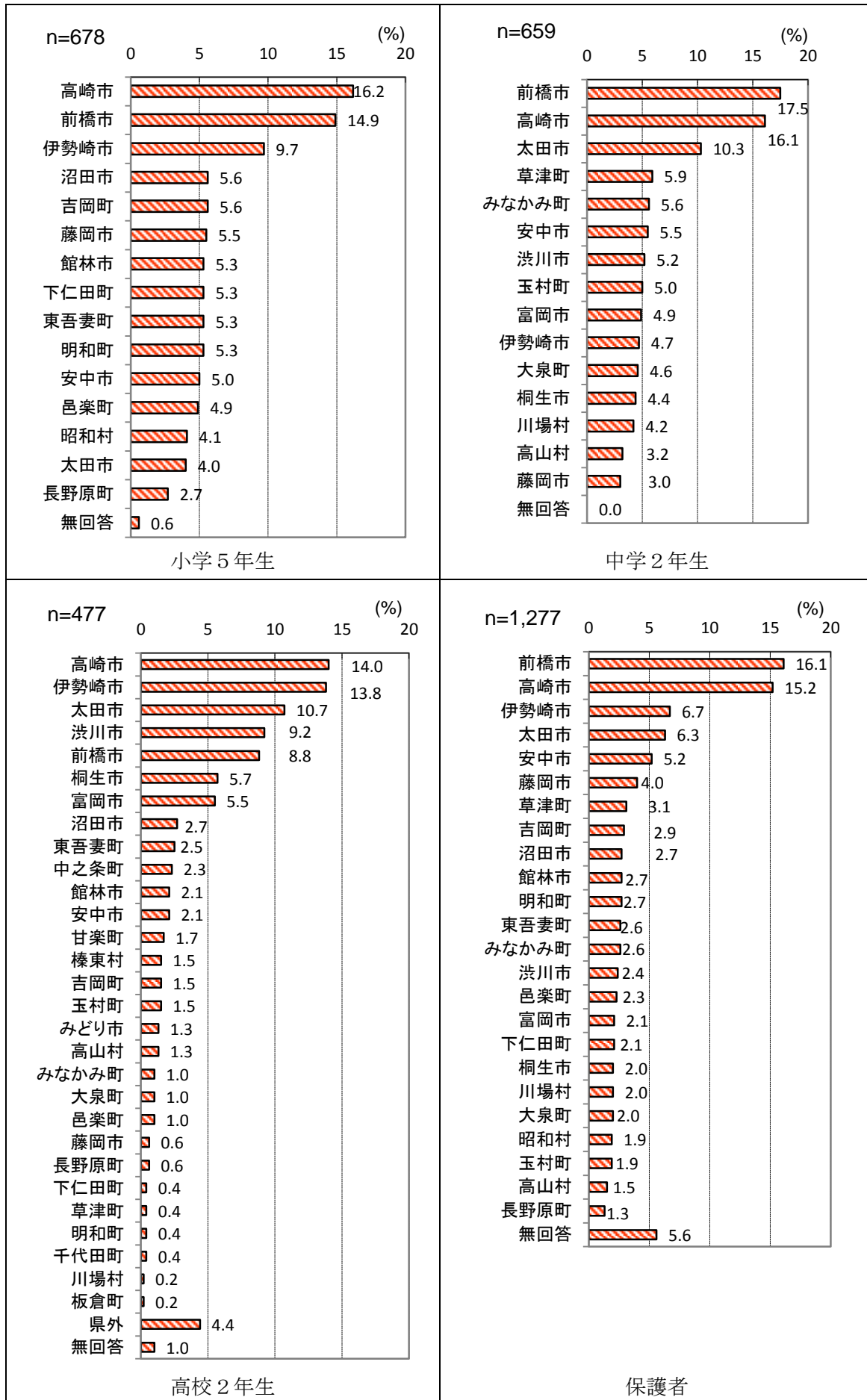
4 同居家族人数

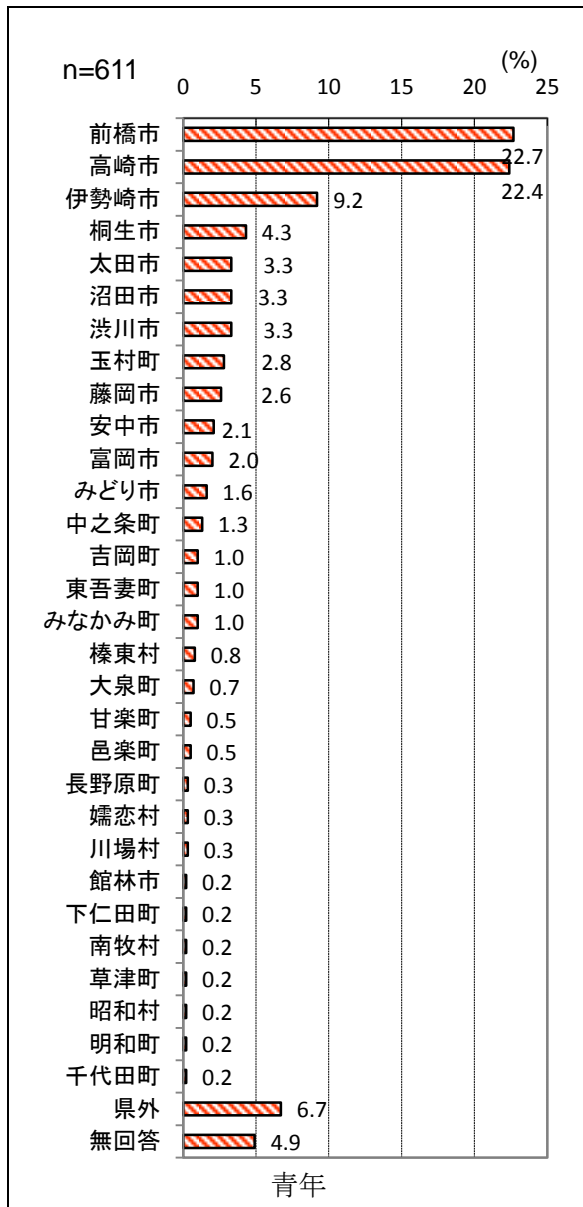


5 兄弟姉妹の人数

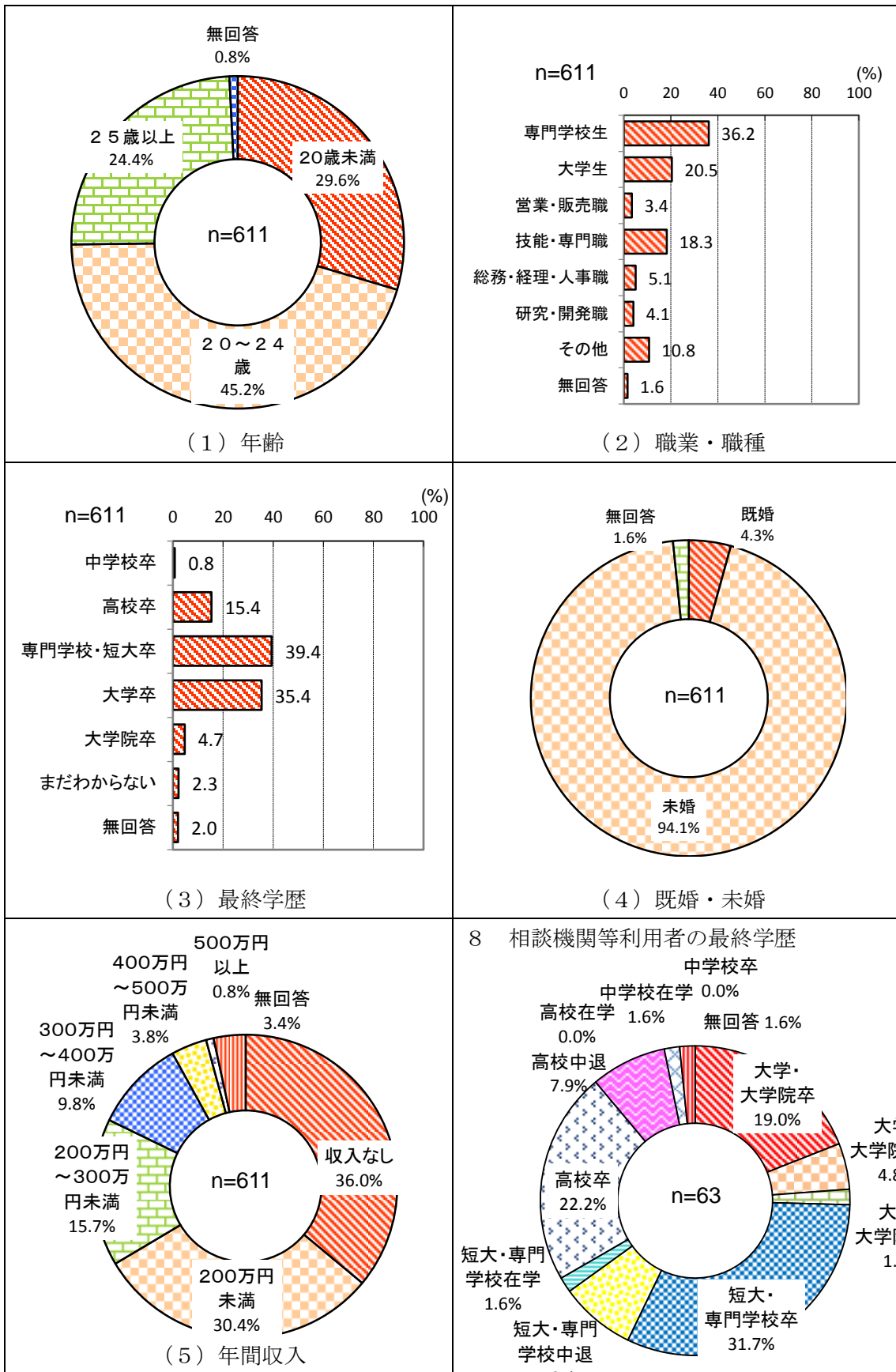


6 居住地

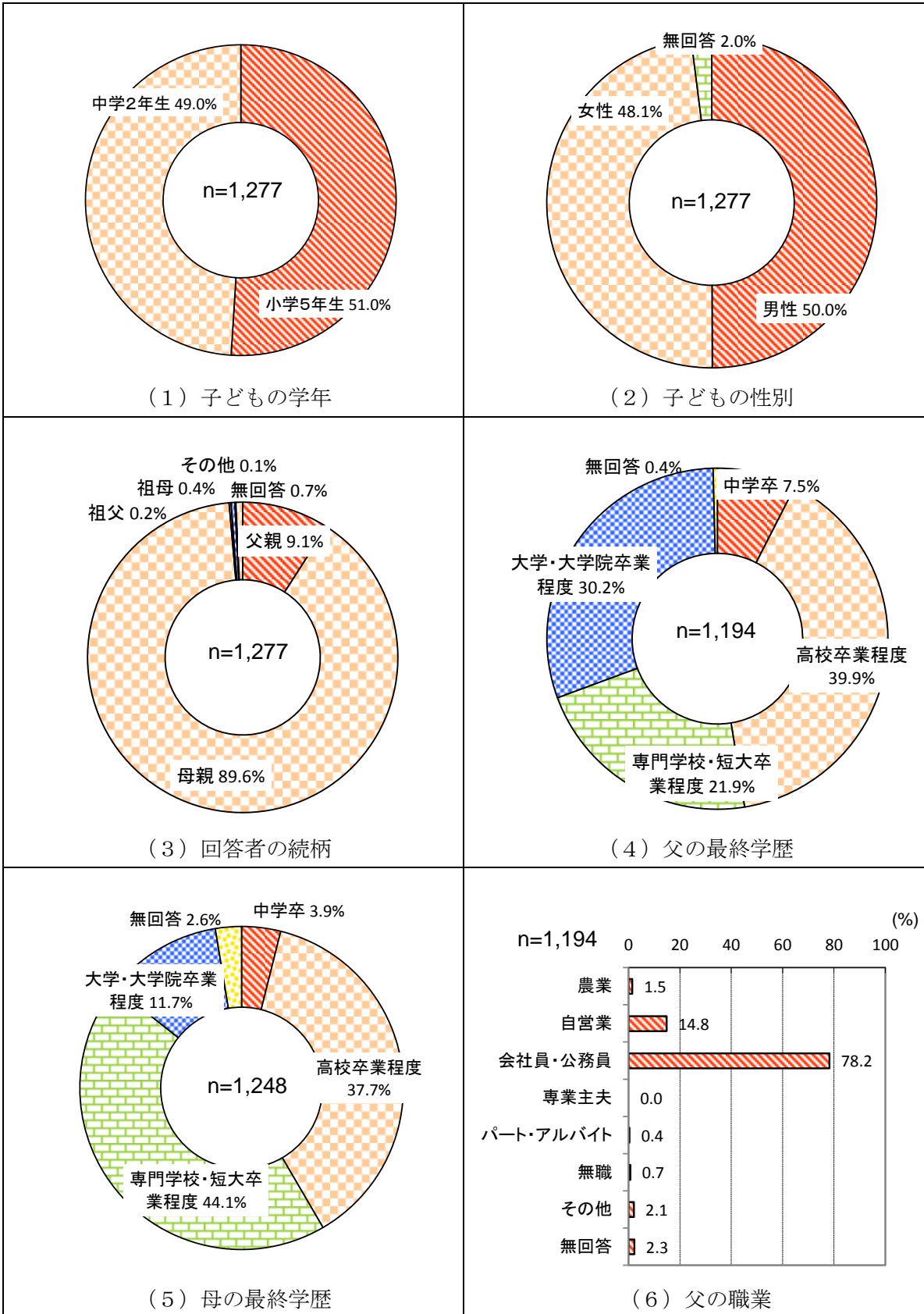


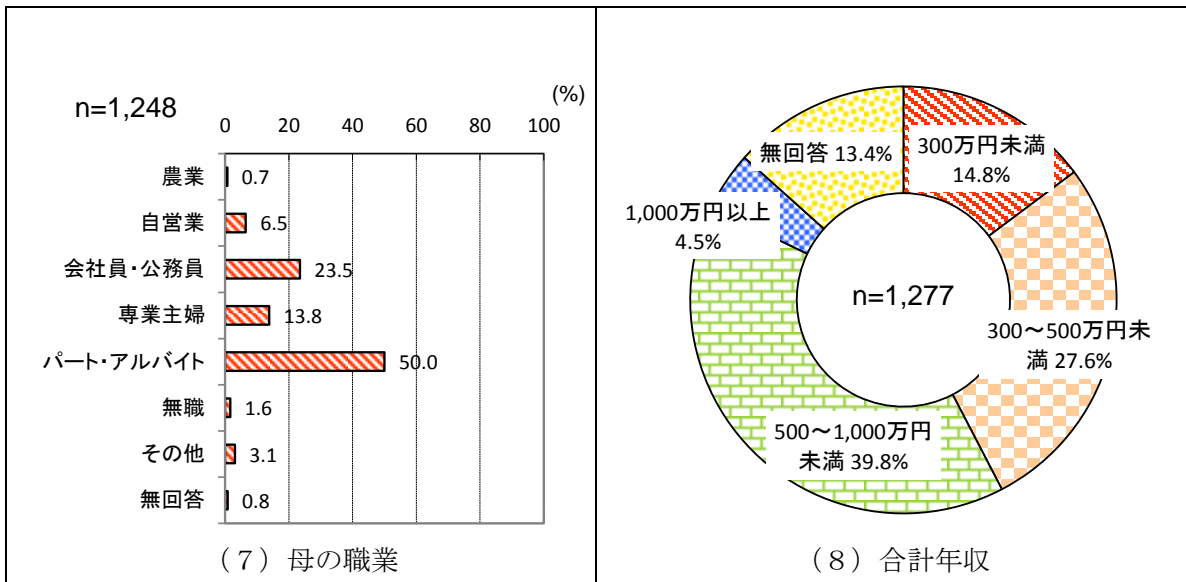


7 青年の属性

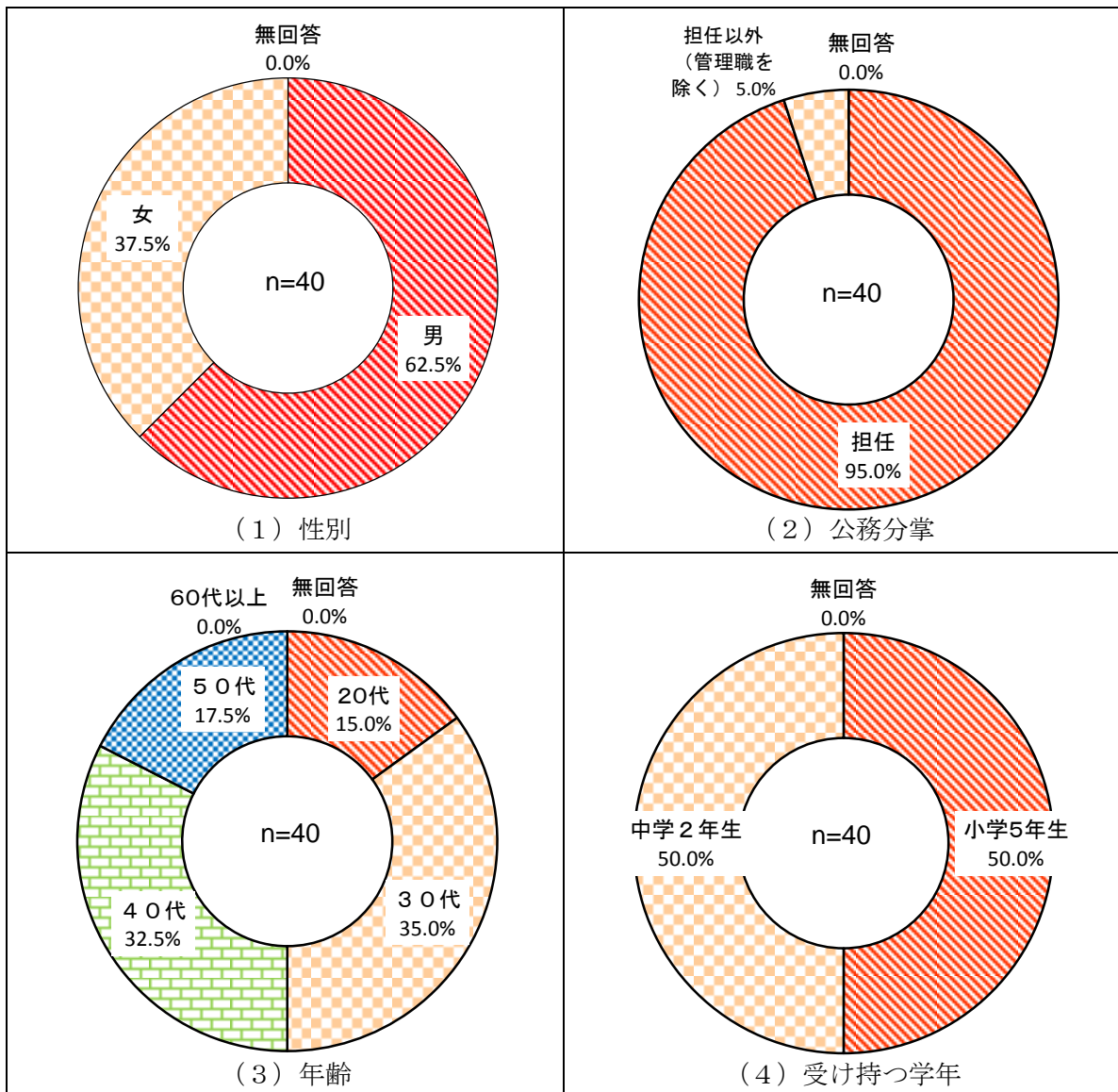


9 保護者の属性





10 教員の属性



第3章 調査結果の概要

<調査項目別集計（第4章）>

1 学校生活

- (1) 授業がおもしろい、学校行事が楽しいと感じている人は、中学生、高校生よりも小学生の方が多くなっています。
- また、第6回調査と比較すると、授業がおもしろいと感じている割合は小学生で増加し、中高生ではほぼ同割合になっています。学校行事が楽しいと感じている割合は、小中学生ではほぼ同割合で、高校生では大きく増加しています。
- (2) 学校の規則に違反する服装で友達が登校した場合に、「まねしたいと思う」と感じている人は、中高生ともに過年度調査よりも減少しています。
- (3) 学校で勉強をする理由は、小学生では「立派な大人になりたいから」、「大きくなったら好きな仕事をしたいから」、「知りたいことがたくさんあるから」が多く、第6回調査と同様の傾向が示されています。各選択肢の回答割合は、第6回調査よりも増加しています。
- 中高生では、「よい高校や大学に入るため」、「好きな仕事をしたいから」が多くなっています。特に、中学生の「よい高校や大学に入るため」、中高生の「好きな仕事をしたいから」が第6回調査よりも増加しています。
- (4) 友人との会話の内容は、小中学生では「テレビやマンガ、映画のこと」、「テレビゲーム、携帯ゲーム機のこと」、「趣味のこと」が多くなっています。高校生では、「趣味のこと」、「勉強のこと」、「友達のこと」の順に多くなっています。
- 第5回、第6回調査と比較すると、高校生の「勉強のこと」が大きく増加し、また、各年代で「趣味のこと」が増加しています。一方で、「テレビやマンガ、映画のこと」は各年代で減少しています。
- (5) 何でも打ち明けられる友達が「いる」と回答した割合は、各年代で7割を超えています。第5回、第6回調査と比較すると、小中学生で減少傾向がみられます。

2 家庭生活・家庭教育

- (1) 両親との会話は、中高生に比べて小学生で多く、また小中高生ともに父親よりも母親と多く会話しています。
- 第5回、第6回調査と比較すると、中高生で父親とよく話をする人が増加し、高校生で母親とよく会話をする人が増加しています。
- また、小学生では、人の集まる場所で迷惑をかけないように父親からいつも言われる人が減少しています。
- (2) 家庭で身につけるべき重要なことは、保護者の回答では、「あいさつや行儀、礼儀作法」、「規則正しい生活習慣」、「食事や食生活」、「自分のことは自分でする自立心」、「ルールや決まりごとを守ること」が多くなっています。
- 教員も保護者同様に、「規則正しい生活習慣」、「あいさつや行儀、礼儀作法」、「食事や食生活」が多くなっています。しかし、「食事や食生活」は、保護者の回答では67.5%となっていますが、教員は小学校の教員で80.0%、中学校の教員で95.0%が回答しており、特に重要なことだと指摘されています。

- (3) 保護者が子どものことで悩みや不安に思っていることは、「勉強や進路に関すること」を5割以上の方が回答しており、「生活態度や習慣、性格に関すること」、「携帯電話やインターネットの利用に関すること」も3割以上と多くなっています。
- (4) 保護者に子どもとの1日の会話時間を聞いたところ、7割弱の方が、1時間以上会話すると回答しています。
- (5) 保護者に、子どもの生活習慣を聞いたところ、「就寝、起床時間が不規則」、「食事の栄養バランスが悪い」が多く、それぞれ約25%が回答しています。

3 地域社会

- (1) 今住んでいるところが好きと回答した人は、小学生で8割以上となっています。大人になってからも今住んでいるところに住みたいと回答した人は、中高生で約25%、青年で約5割となっています。
- (2) 地域活動への参加は、小学生では「いろいろなお祭りに参加する」、「季節の行事」、「地域の行事（各種のスポーツ大会など）」が多くなっています。中高生では「地域の行事（各種のスポーツ大会など）」が多くなっています。
また、地域活動へ参加しない理由は、中学生、高校生ともに「興味がない」が多くなっています。中学生では、「参加したいが時間が合わない」が増加しています。
- (3) 今までに参加したことのある体験は、小中高生では「海や川でおよいだこと」、「海や川で貝をとったり魚をつったりしたこと」、「歩いて山に登ったこと」が多くなっています。
一方、「自分の力で大きな木に登ったこと」は、教員の回答では、小学校の教員の65.0%、中学校の教員の55.0%が、自己肯定感を高めるために必要なことだと回答していますが、実際の経験は、小中高生でいずれも4割前後、保護者（子どもが体験）で3割弱となっています。
- (4) 近所の人にあった時にいつもあいさつをする人は、小学生で8割弱、中学生で7割弱、高校生で5割強となっています。
身体の不自由な人が困っているのを見かけた時に声をかけて手助けをする人は、小学生で6割強、中高生で4割強となっており、各年代で第5回、第6回調査から増加傾向がみられています。
- (5) 保護者における子育ての観点からの居住地域への満足度は、「満足」、「まあ満足」が約7割となっています。

4 生活全般

- (1) 現在の生活に「満足」「やや満足」している人は、小学生で計7割弱、中高生で計5割強、青年で計5割弱となっています。
- (2) 悩みや心配ごとは、小中高生で「勉強や進学のこと」が最も多く、中学生では5割を超えています。高校生では「自分の将来のこと」が2割を超えています。青年では、「自分の将来のこと」が3割を超えています。
悩みや心配ごとの相談相手は、中高生、青年のいずれも「友達」が4割弱、「母」が3割強と多くなっています。また「相談しない」は中高生の1割強、青年の1割程度が回答しています。
- (3) 得意なものや自信のあるものは、小学生では「遊び」、「運動」、「ゲーム」が多く、中高生では「遊び」、「友達思い」が多くなっています。得意なものがない人は、小学生では3.7%、中学生では1割強、高校生では2割弱と、学年が上がるにつれ増加しています。

- (4) 規範意識については、小学生では全ての項目において「しないほうがよい」が9割前後となっています。
- 中学生では、「いやらしい雑誌やテレビを見る」のみ、「してはいけない」が5割強と他に比べて低くなっています。
- 高校生では、「いやらしい雑誌やテレビを見る」を「してもよい」と回答した人が約4割、「髪を染めたり脱色する」、「ピアスをする」を「してもよい」と回答した人が2割以上と他の項目に比べて高くなっています。
- 中学生、高校生ともに、各項目とも、「してもよい」と回答した人の割合は第6回調査よりも減少しています。
- (5) 誰かがいじめられた時の理想の対応について、小中学生では「先生に知らせる」、「いじている人たちにやめるように言う」、「あとでいじめられた人をなぐさめる」が多く、高校生では「先生に知らせる」、「いじている人たちにやめるように言う」が多くなっています。
- 誰かがいじめられた時の実際の対応は、小学生では「いじている人たちに『やめて』と言う」が最も多く、中高生では「友達に相談する」の方がわずかに多くなっています。また、中高生では「自分の親に知らせる」が第6回調査から増加しています。
- (6) 学校に行きたくなかったことは、小学生の5割弱、中高生の約6割が「よくあった」、「1度または何度かあった」と回答しています。
- 学校に行きたくなかった理由は、各年代ともに「なんとなく」、「授業を受けなくなかった」が多くなっています。中学生では「部活に出なくなかった」も3割強と高くなっており、また第5回、第6回調査から増加しています。小学生では、「いじめられた」が増加しています。
- (7) 青年に希望する暮らし方を聞いたところ、「経済的な安定」が4割弱、「好きなことや夢の実現」が約3割と多くなっています。
- (8) 青年に出生率低下の要因を聞いたところ、「結婚年齢が上がったり、結婚しない人が増えたから」が5割強、「仕事と子育ての両立に関する職場の制度が整っていなかったり、職場の理解がないから」、「子育てにお金がかかりすぎるから」が約3割となっています。
- また、結婚しやすい社会かどうかについては、「結婚しやすい社会」は1割弱にとどまり、「結婚しにくい社会」だと5割弱が回答しています。結婚しにくい理由については、「若者が経済的に不安定」を5割強が回答しています。

5 就労意識

- (1) 中高生に将来就きたい仕事を聞いたところ、「自分の能力が活かせる職業」、「安定した職業」がそれぞれ約3割と多くなっています。特に、「安定した職業」が第5回、第6回調査から増加しています。
- (2) 青年に現在の職場について聞いたところ、「満足」「やや満足」は合わせて4割強、「普通」は3割弱、「やや不満」「不満」が合わせて2割強となっています。
- 不満の理由については、「給料が安い」が6割強、「上司・同僚との人間関係」が4割弱、「労働時間が長い」、「責任が重い」がそれぞれ約3割となっています。
- (3) 青年に初めて就いた職業の働き方を聞いたところ、「正社員・正職員」は6割弱と、第6回調査の約7割から低下し、「パート・アルバイト・非常勤職員」が、第6回調査の約2割から3割強へと増加しています。

- (4) 保護者に子どもの就労に対する考え方を聞いたところ、「自分がやりたいことなら転職しても良い」が、「安定した職場・職種に就くことが良い」をわずかに上回っています。

6 インターネット

- (1) 小学生にスマートフォン等のインターネットができる端末を自分用に持っているか聞いたところ、約4割が持っていると回答しています。
ただし、保護者に聞いたところ、小学生の保護者ではスマートフォンを「自分専用のものを所持」、「親と共同で所持」は合わせて約15%にとどまり、「所持していない」が約75%となっています。
- (2) 携帯電話やスマートフォン、タブレットの利用時間は、中学生の約3割、高校生の5割強が2時間以上と回答しています。
- (3) インターネットで知り合った人とメールをしたり会ったりすることについて、保護者の約8割が「やめた方がいいと思う」と回答しているのに対し、中学生は約6割、高校生は4割強、青年は3割弱にとどまっています。「普通に会ってもよいと思う」は、中学生で2.0%、高校生で11.1%ですが、青年では21.4%となっています。
- (4) ブログやSNS等で自分に関する情報を発信することについては、「誰が見ているかわからないのでやめた方がよいと思う」は、保護者で8割弱が回答しているのに対し、中学生では6割強、高校生では5割弱、青年では約3割にとどまっています。

7 若者の自立支援

- (1) ひきこもりの経験について相談機関等利用者に聞いたところ、6割が「ある」と回答しています。
「ある」と回答した人に期間を聞いたところ、回答者の5割弱が3年以上の引きこもり期間があったと回答しています。また、引きこもりになったきっかけは、「人間関係の不信・不満」が約5割と高く、「不登校」、「職場への不適応」、「就職活動の不調」も3割前後の人が回答しています。
- (2) 家族との関係は、「絶えず衝突」、「時々衝突」が計5割弱、「孤立」が1割強となっています。
- (3) 今やりたいこと、将来必要なことは、「仕事」が8割弱と多く、「遊びや趣味」、「友達との交流」、「技術や技能の修得」、「信頼できる相談者をみつけること」もそれぞれ4割前後が回答しています。
- (4) 今まで利用したことのある相談機関は、「ハローワーク・ジョブカフェ・地域若者サポートステーション等の就労支援機関」が約8割となっています。また、相談機関に求める支援は、「就労支援」が7割弱と最も多くなっています。
- (5) 相談機関を利用する上で障害となることは、「どのような相談支援機関が利用できるかわからない」が約5割と最も多くなっています。「相談支援機関を利用するための金銭的成本」、「友人や親戚等周囲にどう思われるか気になる」は、それぞれ3割弱が回答しています。

8 自立について

自立とはどういう状態かを聞いたところ、中学生では、「就職や自営の職業生活をスタートさせること」がわずかな差で最も多くなっています。高校生、青年、相談機関等利用者、保護者の全てで「親から経済的に独立すること」が最も多くなっています。

9 行政が取り組むべき課題

保護者に、青少年の健全育成のため行政が取り組むべき課題を聞いたところ、「いじめ、自殺対策」が5割弱と最も多く、「教育の質の向上」、「基礎学力の修得」も約3割と多くなっています。

10 教員からみた児童生徒の状況

- (1) 最近の児童生徒の特徴は、小学校、中学校の教員ともに「自分の意見を言えない子が多い」が多くなっています。小学校の教員では「授業中落ち着かない子が多い」、中学校の教員では「スマートフォンの所持率が高まり、それに伴ったトラブルが学校内でも多くなっている」、「自分に自信を持っていない子が多い」も多くなっています。
- (2) 児童生徒に特に必要なものは、小学校、中学校の教員ともに「自ら学び、考え、行動する力」、「自分や周りの人の命を大切にできる心」、「善悪を判断する力」、「物事に粘り強く挑戦する力・競争力」が多くなっています。小学校の教員では、「教科の基礎的な学力」、中学校の教員では「社会生活に必要な常識やマナー」も多くなっています。
- (3) 家庭の経済状況により学力の差が生じているかについては、小学校の教員の75%、中学校の教員の80%が「学力差が生じている」と回答しています。
家庭の経済状況が自己肯定感の大きさに影響を及ぼしているかについては、小学校の教員の75%、中学校の教員の60%が「自己肯定感の大きさに影響している」と回答しています。
- (4) 「整理整頓ができていない家庭が多くなっている」、「最近の子は自己肯定感が低い」といった回答については、小学校の教員よりも中学校の教員の方が、回答割合が高くなっています。

<調査結果から考えられること（第5章）>

1 自己肯定感を育むもの

- (1) 『得意なものや自信のあるもの』の数に応じて、自己肯定感の高さを分類すると、小学生では、自己肯定感が「高い」は19.2%、「やや高い」は28.6%、「普通」は34.4%となっています。中高生では、「高い」は21.7%、「やや高い」は16.6%、「普通」は20.1%となっています。
- (2) 小学生、中高生ともに、自己肯定感の高い人は、自己肯定感の低い人に比べて、「地域活動や野外活動等、多様な経験をしている」「両親や家の人と、よく話をしている」「学校生活においておもしろい、楽しいと感じることが多い」「友人関係が充実している」といった傾向がみられています。
また、困難な状況（自分がいじめられた時など）を解決しようとする力があることや、将来に対する希望を持っていることから、子どもの自己肯定感を高めることは重要だと考えられます。
- (3) 子どもの自己肯定感を高めるには、子どもに多様な体験学習等の経験を与えることが重要だと考えられます。子どもに多様な体験学習の機会を与えるには、親や周囲の大人が中心となり、家庭での体験学習の機会をつくることとともに、学校での体験学習の機会も、より充実させていく必要があると考えられます。

2 「結婚についての考え方」と就労状況や就労意識

- (1) 「結婚しやすい社会」と回答した人は、「結婚しにくい社会」「どちらともいえない」と回答した人に比べて、「正社員で働いている人が多い」「初めて就いた職業を継続している人が多い」「経済的な安定を望んでいる」「希望と違う仕事であっても働きたい」「仕事において努力することや

継続することを重視している」といった傾向がみられます。

- (2) 「結婚しやすい社会」と感じている人の人物像として、「やりたい仕事のイメージを持ちつつ、働くことや暮らしについて現実的な考え方をしている」「雇用や就労状況が安定している」といったことが考えられます。
- (3) 今後、若者が結婚しやすい社会にしていくためには、就労状況を改善する取組とともに、やりたい仕事のイメージを持つことや、働くことの重要性など、就労に関わる教育により力を入れていくことが有効だと考えられます。